

秋期福音特別集会(2)(京都)

おさなごにならずば

――マタイ伝第18章1～4節――

1987年11月22日

小池辰雄

翻る おさなごに成れ 芸術のたましい 美と観たまえり 愛の衝動 「の中に」 童心 上か
 らの力 則天去私 法然なる世界 ナイブとセンチメンターリッシュ 遊びの衝動 神然・
 靈然・自然・法然 美の宗教 おさなごの如くに

【マタイ18】

1 そのとき弟子たち、イエスに來りて言う『しからは天国にて大なるは誰か』
 2 イエス幼児を呼び、彼らの中に置いて言い給う、3 まことに汝らに告ぐ、も
 し汝ら翻りて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ。4 されば誰にても此
 の幼児のごとく己を卑うする者は、これ天国にて大なる者なり。

● 翻る

キリストが一番好きなのは「おさなご」だ。

「天国にて大なるは誰か」

なんていう質問の仕方がわるいけれども、キリストは、そのように受け入れて答えられた。
 イエスは幼児を呼んで、皆の中に置いて、

「3 まことに汝らに告ぐ、もし汝ら翻りて幼児の如くならなければ天国に入

れない」

と仰った。「翻る」という字は「方向転換する」というヘブライ語で「シューブ」という字
 です。キリストはギリシヤ語で話されたのではない。ホセア書14章の、原典では5節です
 けれども、日本語では4節に、

「我かれらの逆を医し悦びてこれを愛せん」(ホセア14・4)

とある。この「叛逆」という字は

「シューブ(帰る)」

という字から来ている。ヘブライ語では、「メシューバー」という。「メ」というのは「ミン
 (から)」という字を略したもの。この「シューバー」というのが「シューブ」という字です。
 「いちちらへ帰ることから」

というのが「そむき」という意味になる。「帰ることから」と、反対になってしまって、「そ



むき」という字なんです。「かえる」という字は「から」という前置詞みたいなものが付くと、「そむき」になる。

それを「医す」という。この「医す」という言葉がまた面白い。出エジプト記の15章26節に、
「……我はエホバにして汝を医す者なればなり」と(出エジプト15・26)

ここに「エホバはお医者さんだ」と書いてある。

「アミー ヤーバー ローフェ アッカー」

という。「ラーファー」という字が「いやす」という字です。これは実は

「包帯する、怪我したのを布で包む」

という字で、「包帯で包んでやる」ということ。ドイツ語でいう「ウムビンデン(umbinden)」という字です。これはもともとは外科的治療なんです。この「医す」という字が、それから「救う」という字にもなる。それで、

「**我かれらの反逆を医し悦びてこれを愛せん。我が怒はかれを離れ去りたり**」

(ホセア14・4)

この「離れ去る」という字がまた同じこの「シューブ」という字から来ている。「かえる」も「そむく」も「離れ去る」も同じ字から来ている。「離れ去りたり」は「そむく」と同じ字です。「翻りて」というのは、これは

「…に向かつてシューブする」

なんですから、「エルシューブ」という字で

「…に対して、それに向かつて方向転換して行く」

ということ。これが

「立ち帰り」

という字なんです。「翻る」というのは「立ち帰る」ということ。

「お前たちは翻って、立ち帰って来い」
ということです。

今の文明文化は原始に翻らなければダメだ。「ルネッサンス」(文芸復興)というのはギリシヤの文化に戻ろうということなんです。「宗教改革」は、

「原始のキリスト道に帰ろう」

ということ。両方とも「翻る」ことである。文化的にも翻るし、宗教的にも翻る。これがルネッサンスと宗教改革です。翻ることが本当の前進になっていく。いつも元に戻るわけです。

ホーマー、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、あのギリシヤ文化の世界は最高のところに行っている。キリスト教では預言者と使徒たちです、中心はキリストですけれども、これに翻る。内村先生は、

「預言者を通して私は愛国が分かった。魂の救いはキリストによったけれども」



ということを書いているところがあります。

●おさなごに成れ

「翻る」とは、どこに翻るかと思つたら、

「おさなごに成れ」

ということ。ワーズワースが、『レインボー』という素晴らしい詩の中で

“Child is a father of a man.”

「子供は大人の父である」

と言っている。

「私は虹を見ることに私の心は踊る。

小さい時にそつだった。

大人に成つてもそつである。

年老いてもなおそつでありたい。」

と、彼もおさなごのあの純粋な喜びを讃えて、そういう心情になって言っている。

小川は大河の父なんだ。小川はきれいだ。だんだん大きな河になると濁ってくる。人間もそうだ。大人になればなるほど複雑怪奇になる。悪い意味の混沌としてくる。なんだかんだと、社会的にも国際的にもどうにもならん。だから

「おさなごに帰れ」

という。大自然には国境がない、おさなごにも国境がない。

都会やそこらでも、

「土地の1メートルの何分の1がこつちへ出たの入つたの」

と大騒ぎしている。どうだつていいよ、そんなことは。次の世界へ何か持って行けるんですか。何も持って行けない。どんな大金持ちでも、金を持って行こうたつて持って行けない。大好きな聖書も持って行けない。私自身が、あなた方一人ひとり、聖書そのものとならない限りは。

「私は聖書は要りません、もう私は聖書を生きています」

ということに成つたら本当に読み終わったことだ。

そういう幼児はすべてが全的で、分裂しないで、泣きたい時には泣き、笑いたい時には笑う。欲しい時にはお饅頭の大きな方を取る。みんな偽りが無い世界です。そういう

「^{おさなご}幼児になれ」

と言う。ということとは、もちろんキリストは、ただ「幼児のまねをしろ」ということを言つておられるのではない。

幼児にはお母さんが絶対なんだ。幼稚園の生徒には幼稚園の先生が絶対なんだ。わたしたちは、小学校でも先生は絶対だったね。「はい」の他に返事のしようがない。今の教育は



もうすっかりズレてしまっている。小学校までの本当の教育がなかったならば、もう教育はおしまいだ。問題は先生そのものにある。そういう幼児は天国に入る。

●芸術のたましい

私は『芸術のたましい』（小池辰雄著作集第2巻 1976年12月刊）という本を書きましたが、あれが一番売れない。売れる売れないを問題にしているわけではない。

「福音の世界で芸術は二の次にしておこう」

なんて普通は思っている。ところが、あの『芸術のたましい』に福音の醍醐味ごだいみがある。ことに最初の論説が大切です。その一節をちょっと引用します。

「柳宗悦氏が、棟方志功の版画について次のように書いているが、これは深い芸術衝動、創作の本質に触れた著しい言葉である。「いつか棟方は私にかう話した。『私は自分の仕事には責任を持っていません』と。これを聞いて私には、はたと思い当たるものがあった。凡ての棟方の絵のよさは、かういふ泉から湧いて来るのだと感じた。……人間のすべての行為は、責任以下ではこまる。だが、責任に止まれば、まだ二元の域を出ない。それはせいぜい道徳的だといふに止まらう。しかし、道徳的なものが最後の境地だとは言へぬ。自分が責任の持ち主では、まだ小さいではないか。仮に、神や仏が責任を持ってくれる仕事をしたらどうであらう。その場合は個人が責任を持つやうな小さな仕事ではなくってくる。……自分が責任を持たぬやうな仕事ほど素晴らしいものはないのである。」（『芸術のたましい』12頁）

こういうことは、普通の人には分からない。私たちには、キリストに全託すると、キリストが責任を持ってやってくださる。躓いても転んでもいいんだ、どしどし進んで行けば。マルチン・ルターが

『キリスト者の自由について』(Von der Freiheit eines Christen Menschen)

と書いたが、本当は「クリスチャンの自由について」の「について(フォン)」は要らない。「について」語るのダメなんです、自由の「中から」ものを言わないと。

人種にはそれぞれの特徴がある。いいの悪いのと言っているわけではない。ドイツ人は意志的な国民です。ラテン系は情的です。ギリシヤ人はなかなか知的です。だから、哲学が発展した。日本人は何かと言うと、一番芸術的な民です。知の学問は日本では展開しなかった。

知の世界はカントの「純粋理性批判」の方だ。意志は「実践理性」、道徳の世界です。そして、情は美の世界です。日本人は美の民だ。日本のご馳走だって、まず奇麗なんだ。まず目で見て、目で食べる。それから口で食べる。大体、「美」という字はきれいな字だ。



●美と観たまえり

神さまは天地を造った。創世記の第1章10節に、

「神かむ乾ける土を地と名なづけ水の集あつまれるを海と名なづけたまえり。神之を善よしと観みたまえり。」(創世記1・10)

とある。この「よし」は「善」という字が書いてあるがこれは本当はよくない。善悪の善ではない。

「ああ、結構だな、うるわしいなあ」

と、この「よし」は「美よし」なんです。「美しいうつくしい」ということです。

「美よしと観たまえり」

ということ。神さまの造ったものはみな美しい。

「大自然はうるわしいな」

と言う。「大自然は善いな」なんて言いはしない。日本語で「よい」というのも「美」の感覚から言っているわけですよ。「ああ、いいなあ」と。「ああ、善だなあ」なんて言いはしない。このヘブライ語の「トーブ」という字は、この時には本当に

「ああ、これはよかつたな、いいなあ、うるわしいなあ」

という、神さまの善悪の範疇でない判断の言葉です。私はそう言ったら、イスラエルで勉強して来た或る友人が

「先生は本当にラビみたいだ、そのとおりです」

と言った。私は直感するんです。

そういうことで、これは全部、神さまが、

「ああ、いいなあ」

と、ドイツ語でいえば、「ゲフェリツヒ (Gefällig)」「気に入った」という意味です。

●愛の衝動

「神さまは創造した」

と言う。創造は愛の衝動です。神さまはお造りになった。これは愛の衝動なんだ、目的ではない。愛の衝動、愛の現れです。創世記で、「よい」というのは、神さまの創造はたくまざるところの自然の現れで、愛の現れであるということです。造られたアダムとイブは思うがままにやって良かった。これはおさなごの姿なんです。

「神 光あれと言いたまひければ光ありき」(創世記1・3)

というのは、これは二段構えではない。「光あれ」という言葉と同時に、いや、言葉よりも奥の「思い」と同時に、光があつた。「言いたまひければ」の「いう」という字は、漢字で言う、「謂いう」という字を書くといい。これは「謂おもう」という字と両方の意味になる。「いう」という言葉と「おもう」という言葉が同じ字だ。だから、私はこういう字を使いたく



なる。

神さまは意こころで謂おもうと、それが直ぐ力になる、言葉になる、行為になる。それは全部、一如の展開です。これが「自然」なんです。

「自由」という概念は、ルターに言わせると意志の世界の自由です。意志の自由なんだ。「人間には、意志の自由は哲学的、道徳的にはあるけれども、それは本当は失われている。神さまの僕にならなければ本当の自由はこない。キリストを絶対とする

ところに絶対の自由がある」

ということをルターが言っている。

「御霊のあるところに自由あり」

という、意志的な角度からの自由なんです。

ところが、私は「自由」をむしろ「無碍むげ」と言いたい。あるいは、「自由自在」と言いたい。この「自」という字は「おのずから」と読む。ルターの方は「みずから」だ。「みずから」が意志的な自由の世界です。「おのずから」は何ですか？

「おのずから」という世界は、これが幼児おさなごの世界なんです。自然の世界です。あるいは、必然の世界です。そこでは「自由」と「必然」は一つになる。知らないでやってしまう。子供は外へ行って何かやって帰って来たら、

「お前、何をして来た？」

と聞くと、

「いえ、何もしない」

と答える。子供が「何もしない」と言うことは、「おのずから」やっているから、いわゆる意識的なものは何もない。これが「何もしない」という世界です。やっていて、しない。老子に言わせると、「無為の為」ということです。「無為の為」は目的でない、「無目的の目的」の世界です。「無道の道」と言う。道なき道を行く。これが、みんなおのずからの世界です。実は、福音の最後の境地はそれなんです。

「おさなごの如く」

というのが、そのことです。

「私は何もできない。何もしない。善くもない、神さまだけだ。それでただ動いているんだ」

と。これがキリストの神然しんぜんの世界です。私たちは神然にはなれない。御霊において靈然れいぜんの世界に入る。神然・靈然・自然。これはみなあい連なっている。これがおさなごの世界です。

●「GPM」

昨日は内村先生の、

“for Japan,



Japan for the World,"
 「私は日本のために、
 日本は世界のために」
 を引用しました。

「私は日本のために」
 とは、私の存在は日本の為にあるということ。これは正に大事なことです。

「日本は世界のため」
 で、世界は日本のためではない。

"The World for Christ,
 And All for God."

「世界はキリストのため、
 そして、一切は神のため」

と。昨日はそこで止めてその先を言うことは控えていた。今日は何を言うかということ、この「for」「のために」ではまだダメです。

"In Japan,
 Japan in the World,
 The World in Christ,
 And All in God."

ということです。すべて「in」「の中に」の世界に入らなくては。これが「おのずから」の世界なんです。おのずから証しするのがこの世界です。

「我れキリストの中に、キリスト我が中に」

と言ったあの実存のパウロ、これが本当の証しの世界をやった。「私はキリストのために」なんて言っているよりか、もう一つ先の世界です。

「私は日本だよ、日本は私だよ」
 と言ってもいい。「私は世界だよ」と、ゲエテというのはそういう人です。

「私は宇宙だよ、宇宙もうつつしかげだよ」

と。これが本当の本ものの証しの世界になる。これが伝道ならざる伝道になる。ゲエテが、
 「情感が一切だ」(ゲフェール イスト アッレス Gefühl ist alles.)
 と言った。あれは、私は「体感」と訳す。

「身体で感じる一切だ」
 ということ。また、彼は、

「行為が一切である」(タート イスト アッレス Tat ist alles.)

と言った。そういうのは、みんな円環関係になっている。二段構えではない。

おさなごの世界はそういう芸道の世界、たくまざる世界です。これが本当の芸道なんだ。「芸



術」という言葉は私は嫌いだ、術ではないから。「芸道」です。

「神さまは最大の芸術家だ」

と私は言っている。神さまの作品は、創造の業は、本当に美の世界です。

「美しい魂」

という言葉もある。なぜこうやって花を置くんですか。みんなやつぱり美が好きだからです。そういう、おのずから成つていくようなのが本当の創作であり、本当の創造であります。神さまの創造はその角度からきている。それを壊してしまったから、またやり直しをキリストは為してくださった。

「人間的に造った壮大なソロモンの栄華も、野の百合の花の一つにかなわない」という。神さまの創造の美というものにはかなわない。

●童心

人間の知情意のいろいろな特色は、それぞれ大事なものを持っていますが、知の世界で、また美の世界で、人間の側から素晴らしい花を咲かせたのがギリシヤです。つまり哲学と彫刻の芸術。絵の方はラテン系だ。耳の音楽の方はドイツ系だ。それぞれの役割を果たしている。日本は、どっちかと言うと、絵の方だ。文学はそれぞれの民族に素晴らしいのが出ています。

文学の中で一番凄いのが聖書だ。だから、私は第十巻の題名は『聖書は大ドラマである』という表題に変えたのはそれでなんだ。聖書一巻にはシェイクスピアもかなわない。聖書の中にはあらゆるものが展開している。

しかし、ユダヤ人は偶像を嫌ったから、彫刻の方や絵の方では展開しない。音楽の方や詩が――預言者は神さまの言葉を伝えているから、みんな詩になっている――イザヤ書なんか素晴らしい。文語体のイザヤ書を読んでいると、もうそれだけで満たされてしまう。

どれが良いの悪いのと言っているわけではない。特色を言っている。良い悪いという判断はヘタすると躓きになる。それが本ものでさえあればどれでもいい。神の栄光を本当に現しているか。それを本当に現している世界の、その現しの相が「おさなご」の相なんです。止むにやまれずして、文章や詩を書く。止むにやまれずして、絵を書く。止むにやまれずして、彫刻をする。

「止むにやまれずして」

というのが、おさなごの世界なんです。童心です。偉大な人物は死に至るまで童心を失わない。童心を無くしたら、本当の偉大さに入らない。ゲーテでも、ダンテでも、ユゴーでも。

音楽で言うと、民謡(フォルクスリート)です。

「ベートーベンの第九シンフォニーにも民謡調がどこか底流にある」

と、ある音楽家書いている。おとぎばなし(メルヒェン)は文学の初めて終わりである。



日本に來た哲學者で、メルヒエンを非常に評価したのがラファエル・ケーベル先生です。昔の東大で哲学を教えていた。

「この^{おさなご}幼児を^{つます}躓かせるならば、首に^{うす}ひき白をつないで海に沈めてしまおうぞ」なんて、キリストは恐ろしいことを言っている。

「二人の^{おさなご}小さき者を愛するは我を愛したるなり」

と。病人とか身体障害者とか、あるいは罪びとすらも、悪鬼に^{とら}囚われたマグダラのマリヤすらも、キリストは顧みてやまない。これを本当にみんな救い上げる。だから、

「そういう宗教はキリスト教のほかはない」

とゲーテが言っている。最期の、十字架上の盗賊をも、キリストは最初に天界に連れて行ってしまった。

サタンは小さなみどりごを殺しますか？ そんなサタンがいたら、サタン中のサタンだ。ところが、旧約の中には、詩篇の中には恐ろしい言葉があるが、あれはいかん。ユダヤ人にはまた凄い悪い面がある。百科事典の世界の人種の顔のところを開くと、日本人が一番柔和な顔をしている。

「^{さいわい}恵福なるかな柔和なる者」

ということですよ。

●上からの力

ギリシヤ語で「カリス」という言葉がありますが、聖書の上では「恵み」という字です。それから「カリスマ」となると霊的な^{たまもの}「賜物」になる。この「恵み」という字がまた「美」という字に通じる。ドイツ語で言うと

「アンムート (Anmut 優美)」

という。意志の世界は

「エアハーベン (Erhaben 莊嚴)」

という。意志の世界は「優美」に対して「莊嚴」と言う。莊嚴なるもの、優美なるもの。本当の芸術の世界はいろんなものを持ちます。だから、芸術という言葉も当たらない。

「^た芸術は長く、^ち人生は短い」 (Die Kunst ist lang, das Leben kurz.)

と言う。

「^た医療はなかなか悠久で、^ち生涯これを極めがたい、だから人生は短い」

と、医学の元祖のヒポクラテスが嘆いた言葉がある。彼は偉い。

「人間は自分が頂いた生来の力と自然の環境において治るようになってきている。薬や

医者はただ一時的な補助に過ぎない」

とは、ヒポクラテスの、医学の祖の言葉です。今の医学はそれからまるで間違ったことをやっている。医学もまた元へ戻れ、ということだ。



あの「クンスト」(Kunst)というドイツ語は「技術、芸術」という字だけでも、もとは「ケンネン」(können)「できる」という動詞から来ている。可能である、働きがあるという字です。この「できる」力は我々には実はないんだ、ある程度しか。上からの力が来なければ、この「クンスト」は成り立たない。だから、芸術も神さまによらなければ、本当の芸術にはならない。日本に偉大な芸術が出てこないのはそこから来ている。

● 則天去私

漱石も、

「則天去私」

なんて言ったけれども、まだ言っているだけだ。漱石自身も、終わりの手紙でそのことを嘆息している、「とうとう自分はそこへ行かなかった」と。

「天に則して己を去る」

とは素晴らしい言葉だ。則天去私を私たちに無条件にくださっているのがキリストではないですか。我々は天に則(即)した人間にされてある。「去私」は、十字架によって「去私」されている。聖霊によって「則天」されている。「則天去私」は

「十字架・聖霊」

なんです。我々は天国人です。

「天国は近づきたり」

ではない。

「天国は汝らの中にあり」

ということ。この「則天」は己おのれをもう去っている。相対的現実の「小池」には己はありますよ。けれども、

「そんなものはや問題にしない」

ということ。十字架でいただいているんですから。十字架の御許にただ額ぬかづく必要はない。

「十字架はこんなに開いている。お前はここへ遠慮なく入って来い。なぜ入って来ないか。なぜ、この門をくぐらないか。我は門なり、我は十字架という門なり」

と。考える余地がない。おさなごの心で入って行けばいい。聖霊の力がグワーツと来る。そうしたら、その先は詩篇23篇だ。緑の牧場、憩いの水ぎわ、聖霊の風が吹いているところの現実だ。それはもう「則天去私」だ。天国に入ってしまった。天国人だから、どんなに回りが冷たくたって、暖かくしてしまおう。

● 法然なる世界

佐藤一斎さとういつさいの『言志録げんしりく』に

「雲煙は止むを得ずして集まり



風雨は止むを得ずして漏れ
雷霆は止むを得ずして奮つ

ここにもつて至誠しせいの作用を見るべし」

という言葉がある。自然現象はみな止むにやまれずして展開している。これが自然必然の世界です。宗教の、福音の本当の世界は、それが法に乗っかっているということです。法然上人というのがいるが、「法然」なる世界なんです。ローマ書8章2節の

「活ける御霊の法」

なんだ。あれは法然の世界です。

仏教には素晴らしい言葉がある。日本人の肌にはむしろ仏教の方が合う。血なまぐさい砂漠の宗教ではないから。それはユダヤには合うけれど、日本はこんな美しい天然では、本当は砂漠の宗教は合わない。仏教の方が合う。けれども、地球はまんまるい。西も東も南も北もない。しかし、誰がキリストほどに神を現したか。お釈迦さんもかなわない。だから、我々はキリストのところに行く。最高絶対の世界だから。血なまぐさくたつてしようがない。その血は生命の血として、

「わが血を飲め、わが肉を食らえ」

と。凄いね、あの言葉は。ユダヤ人自身か、

「何だこれは？ エライことを言う奴だ」

と言って驚いたんだから。ヨハネ伝の6章に書いてある。生命の生命、切れば血がほとばしるような生命の世界です。霊肉渾然こんぜんとしての救いを持った、もの凄い世界。復活のキリストがお魚を食べる世界です。

ゲエテも死ぬ二週間前に、

「キリストの前には無条件に頭を下げる。自然界では太陽の前に無条件に頭を下げる」

と言った。彼は太陽が好きだから。

ゲエテは太陽の子だ。ダンテは星の子だ。私は昼間はゲエテを相手にし、夜はダンテを相手にしている。そういう気持だ。ゲエテとダンテを相手にしているなんてのはちょっと他にはいない。

● ナイブとゼンチメンターリッシュ

ゲエテと並び称せられるところのシラーという詩人がいる。シラーの『美学論』は素晴らしい。あのシラーの論文の中に、

「素朴文学と情感文学」(Über naive und sentimentalische Dichtung)

というのがある。「ナイブ」ということと、「ゼンチメンターリッシュ」ということ。

「ナイブ」というのは「素朴」ということ。幼児の世界はこの「ナイブ」の素朴な世界です。「ゼンチメンターリッシュ」とは日本語では「感傷」と訳す。俳句の世界で言うところ、芭蕉は「ナ



「イーブ」の素朴の世界です。自然と融合している。一茶は人間界を批判して取り組んでいる。これは「センチメンターリッシュ」の方です。どっちがいい悪いということではない。それぞれの特色で結構です。

私は一茶も好きです。私は何か読むと、その境地にすぐ入ってしまう。いわゆる外から批判しない。その中に入ってしまう。そして、その良さをつかむ。非常に柔軟だ。ゲーテを読めばゲーテとなり、ダンテを読めばダンテとなり、シェイクスピアを読めばシェイクスピアとなる。シェイクスピアも素晴らしい。本当に驚くべきものだね、あのシェイクスピアという奴は、化け物だよ。

皆さんはマンガなんか見てないでしょうね。日本はマンガ文明で困るよな。聖書までマンガになってきたそうだ。吉田松蔭は、

「万巻の書を読むにあらざるよりはいづくんぞ千秋の人となるを得んや」

(万巻の書を読まないでいてどうして永く名が残る人となることができようか)

と言った。私はそれを色紙に書いて私の書齋に掛けてある。松蔭という人は偉い。佐久間象山もそうだ。彼は四時間くらいしか寝ない。

「象山はいつ寝るんですか」

と聞かれたくらいだ。松蔭もそうだ。仆たおれたのは32、33歳でしょ。彼の読み得る本を全部読んで、書いた松蔭全集というのは何十冊だよ。驚くべき人だ。全く打ち込んでいる。文句なしに頭が下がる。昨日も言った通り、

「量ではなく質だ」(Non multa sed multum (ラ) 'Not many but much (英))

ということ。質的に深くやれ、量的にただ多いのはダメだということです。

●遊びの衝動

とにかく、そういう「ナイーブ」な世界がおさなごの世界です。第一級のもの皆この「ナイーブ」な要素を根底に持っている。ゲーテはもちろん、両方持っています。けれども、「ナイーブ」な方がゲーテには多い。シラーは「センチメンターリッシュ」の方が多い。

「自分の詩の世界はセンチメンターリッシュだ」
 と言っている。この「センチメンターリッシュ」とはいわゆる「センチメンタル」とは違う。非常に思索(デンケン denken)の面が多い。そして劇的な構造をもっている。だから、シラーは劇文学ではドイツの第一人者だ。ゲーテの『ファウスト』というのは劇にはなかなか難しい。第一部はいいけれども、第二部になったらダメです。あれは読む劇です。

「ナイーブ」な世界で創作しているところのゲーテの作品の創作の姿は何かと言うと、

「遊びの衝動」(シュピールトリップ Spiel Trieb)

と言う。この場合の「遊び」という言葉は非常に深い言葉です。何でも楽しくならなければ本ものではない、ただがんばっていたって。日本人は「がんばれ、がんばれ」とよく言



うね、がんばっているうちはダメなんだ。楽しくなれば本当の世界です。もの凄い力があって、それで楽しい。これが「遊び」の世界です。

「鳥が歌うように、私は詩を作っている」

とゲーテ自身も言っています。おのずから湧いて来る世界です。

「汝の腹から泉が湧きいでるよ」

という世界。善きことをしていても、善きことをしているとは思わない世界です。これはキリストがマタイ伝の終わりの方で、

「お前は私に水を一杯くれたね」

「いつ上げましたか」

「いや、喉の渴いた人にやったのは私にしたんだよ」

とおっしゃった。意識で反省しているうちはダメです。無意識、超意識と言ってもいい。そういう衝動が「遊びの衝動」なんです。遊びの衝動で、存在の根底から成っていくのが本当の芸術です。だから、これは「術」ではない。私は遊道と言いたい。遊びの道です。ゲーテは、「神の中に生き動きまた在るなり」という言葉が大好きだった。パウロがアテネ伝道するとき、アレオパゴスで演説したときにそれを言った。

「我は神の中に生き動きまた在るなり」

と。その中で

「生き(レーベン leben)、動き(ヴェーベン weben)、在る(ザイン sein)」

この「生き動き在るなり」が遊びの姿なんです。我々は、

「キリストの中に生き動き在るなり」

です。これは、

「キリストの中に遊んでいる」

ということ。その人が在るということが、それ自身がもう伝道である。ある時は、それは語るでしょう。ある時は按手もするでしょう。みなそれはただ現象の面です。しかし、一番大事なのはこの「ザイン」「在る」ということです。

「ドウー(為す)・クリスチャンでなくて、ビー(在る)・クリスチャンであれ」

と、内村先生がどこかで書いている。幼児の遊びの世界が「レーベン・ヴェーベン・ザイン」(生き動き在るなり)です。

● 神然・靈然・自然・法然

大自然はゲーテにとつては友達であった。本であった。生命のつながりであった。自然がおのずからゲーテを通して現れている。真似して現れているのではない。自然を模倣しているのではない。自然がゲーテの中で生きて変貌して現れている。これが本当の芸術です。

人間の歴史的なドラマもみなそうになっている。自然におのれを通して現れている。キリ



ストの福音が我々を通しておのずから現れている。それが証者となるということだ。証者も本当は遊びの世界、遊びの姿です。女の人や子供はその世界に入りやすい。「遊び」という言葉に躓かないでくださいよ。

要するに、神然・靈然・自然、法然ということ。この法然は、本当の意味で遊びの姿、遊びの世界だということを、芸術との連関においてお話しているわけです。あなた方の生活そのものが大芸術、ドラマなんです。我々は自分でドラマを展開している。書かなくたっていい。ドラマを展開して、いったいそのドラマの中心は何かと言うと、この福音です。福音でなければ本当のドラマが展開しない。これはもうはつきりしている。東西古今のもの一切をもつて、これを展開してくださるのはキリストのこの福音です。だから、無限無量の福音だと言っている。限定なんかできない。いろんな人生のドラマにぶつかって、疲れたときにぶつかると、聖霊は力をもつて、光をもつて、生命をもつて働いてくださるから、有り難くてしょうがない。キリストの霊は何ものとも代えることができない。それの本当の妙境は遊びの境地です。

「キリストの中に生き動きまた在る」
だけです。

●美の宗教

「シラーは、キリスト教はただ一つの美的な宗教であると言っている」と、ケーベルさんが言った。シラーは凄い。その点でケーベルさんは非常にシラーを評価しています。シラーの論文に

「人類の美的教育論」(Ästhetische Erziehung der Menschheit)

というのがある。なかなか難しい論文です。「エステーティッシェ エルツィーウング」とは「美的教育」ということ。天国的な現実、そこに本当の「真理」があると言う。この

「真理」(ヴァールハイト Wahrheit)

という訳が私は嫌いです。「ヴァールハイト」とは「本当の世界」ということです。「真理」という言葉にしてしまうと、どうも観念的になってしまふ。あるときは「真相」と言いたい。これは「本もの」の世界です。この本ものの現実と生まの現実の世界とを橋渡すものが「芸術」(クンスト Kunst)の世界なんです。

「美」(シェーンハイト Schönheit)

の世界です。キリストはこの橋渡しをしてくださったから、

「キリスト教は美の宗教だ」

ということを言っている。芸術のアナログアです。これは「ヴァールハイト」「現実、真相」の世界。こっちは

「現実」(ヴァイルクリッヒカイト Wirklichkeit)



この二つを橋渡しするのが芸術、美の世界です。「虹」の世界です。だから、シラーの「芸術家たち」(ディクンストラー Die Künstler)

という詩があるが、素晴らしい思想詩です。私はそのうちに訳して解説したいと思うくらいです。長い詩です。その詩の終わりの方に虹のことが出ています。これは私の文章ですが、

「七彩の優美な光へとかの白き和光が優しく分光することく、光虹の七色の光線がかの白光の中へと溶け合っていくごとく、そのように幾倍もの澄明さの中で恍惚たるまなざしを魅了しつつ、君らは真理の結合の中へと帰一し、光明の潮流の中へと流れ帰れよ。

即ち、多彩の美の表現もついには真理の中へと有機体的な大調和をもって帰入し、多彩な光の流れも白光の大潮流の中へと流れ帰る。「万法帰一」「いずれのところにか帰する」(禅宗の言葉) という消息である。これは、先にブレイクの詩句が同じことを逆の角度から暗示しているではないか。云々」

「一粒の砂の中に宇宙を見る」

ということ。部分が全体をつかんでいるような世界です。

●おさなごの如く」

あなた方一人ひとり全召団をつかんでいる、担っている。

「我は全召団なり」

という一人ひとり。そういうところに来たならば本ものです。それは、

「キリストの中に生き動きまた在る」

という存在が、そのことを言わず語らずのうちに、あらしめていられる。それからはずれたら、この召団は崩れていきます。人間的にいろいろな調和をしようなんて、工作は要らん。お互いにそれぞれの特徴を見て助け合って行くことだけです。だから、私はあなた方に決して画一的なことは言わない。どうぞ各召団はそれぞれの特徴でやってください。それを大きく調和してくださるのはキリストですから。人間的な工作は要りません。

そういう無のところ絶しなないと、いわゆる「ゼンチメンターリッシュ」では本当の力は来ない。これは「ナイーブ」に、遊びの心にならなければ、自らの世界にならないと。太陽が照れば、自ら我々はお互いに見ることができるとして、見ようなんて思わなくたって。太陽の光は自らの世界を展開する。空気もそうだ。我々は自らこれを吸っている。さその次は吸って、その次は吐こうなんて、そんなことを思っただけではない。それが本当の世界、遊びの世界です。

この「神の中に生き動きまた在るなり」という言葉は素晴らしい言葉だ。

「我はキリストの中に生き動きまた在るなり」

ということ。キリストの中にあつて静動自在だ、自在無碍だ、天衣無縫だというわけ。人間は、だいたい自分自身が劇的な存在ですから、躓いたり転んだりいろんなことがあ



ります。いいですよ。しかし、この中心をいつも光らせて、そこでもって動いていってくださいます。これが

「自己教育」(ゼルプストエアツィーウング Selbst-erziehung)

という、自らを鍛えていく本当の教育なんだ。

さつき、

I for Japan

を言い換えて、

I in Japan

ということ。これを覚えてください。覚えると言ったって、頭ではない。

I am Japan

でもいい。一つになってしまおう。本当の日本人は日本を超越した世界人になる。世界人になると言ったって、コスモポリタンではない。漱石は本当の日本人だが、あの文学は世界的な文学の質を持っている。源氏物語がそう、万葉集がそう。ドストエフスキー、ダンテ、シェイクスピア、ゲーテ、みんなそうだ。それぞれの特色をもって人間におよそ訴えるものを持っている。

人間という普遍的なるものに、本当の人間になろう。そうすれば、本当に握手できるではないか。なぜ、ソ連とアメリカが握手しないか。みんな本当の人間ではないからだ。

西郷南洲なんてのは遊びの境地の人だ。天を相手にしていた。

「敬天愛人」

とは素晴らしい言葉だ。

「子供は大人の父である」(Child is a father of a man.)

と言う。キリストは、

「翻っておさなごの如くにならないと、天国に入れない」

と仰った。

「遊びの人にならないければ天国に入れない」

という。おとぎばなしは文学の始めで終わり。民謡(フォルクスリート)は歌の始めで終わり。鮒釣りは釣りの始めで終わり。みんなこれ^{おさなご}幼児に帰る。アルファ即オメガと言う。

このキリストという驚くべき、神然たる人の中に、私たちは入れられましたから、本当の原始力が来るから、学問であろうと芸術であろうと普通の事業であろうと何でもござれ。これで展開していくと、その人自身が本当の芸術的作品となるというわけです。

